



各都道府県が
取り組む
教育改革

広島県

県内12校の 総合学科で特色 ある高校作り

高校教育改革のバイオニア的役割を担った総合学科。多様な教科・科目が開設され、生徒が自己の興味・関心などに基づき履修できるのが特徴だ。広島県ではこれまで4校に総合学科を設置したが、10年度からは大幅に開設校を増やし、全12校となった。全国的にこれだけの数を設置しているのは広島県のみである。積極的に教育改革を推し進める同県教育委員会に話を伺った。

自ら学ぶ意欲を 高めるために

昭和23年の新制高校発足以来、日本の高校教育は普通科と専門学科（そのほとんどが職業学科）の2学科制によって行われてきた。しかし6年度より新たに総合学科が創設されることになった。9年度では、40都道府県74校に総合学科が設置されている。

広島県が総合学科を設置したのは、7年度の高陽東高校が最初である。以

来、8年度に三次青陵高校、9年度には大竹高校と至誠高校（現在は戸手商業高校との統合により戸手高校）に総合学科が開設された。そして10年度からは、広島観音高校、福山誠之館高校など一挙に8校に設置（呉市立呉高校を含めて県内に計12校）。総合学科導入に関してはどの県も手探り段階だが、広島県は他県より一歩踏み出した形となった。この背景について、広島県教育委員会事務局教育部教育企画課の松木寛前課長は次のように語る。

「広島県では平成7年に『広島県高等学校中長期ビジョン』を策定しました。その中で、生徒1人ひとりの可能性を伸ばし、自ら学ぶ意欲や表現力などを育成するために、多様な科目を設けた選択幅の広い柔軟な教育課程の編成を方針として打ち出しています。総合学科はまさにその方針に適合した学科といえます。実際に、総合学科に通っている生徒は、生き生きと意欲を持って学習しているという声を教師や保護者の間からもよく耳にします。ま

普通科や専門学科は どう変わるの？」

総合学科の特徴としてまず挙げられるのは、多様な教科・科目の中から、生徒が自分の関心や進路希望などに沿って主体的に科目を選択できるという点。「学習指導要領」に定められた必修科目以外に、原則履修科目、総合選択科目、自由選択科目を設置している。原則履修科目は、将来の生活についての知識・意識を深める「産業社会と人間」、情報化時代に対応した「情報に関する基礎的科目」、自分の知的好奇心に基づいて調査・研究や作品制作を行う「課題研究」の三つで構成される。一方、総合選択科目とは、学校側が情

的にどのような科目を編成しているかについてだが、これは各高校ごとに異なっているという。

「基本的に総合学科は、その学校に通っている生徒によって作り上げられていくものだと思います。最低限必要な必修科目は別にして、そのほかの科目は生徒自身が主体的に選択することによって成り立つわけですからね。また、ひとつ口に総合学科といっても、普通科から総合学科に移行したものの、専門学科から移行したもの、二つの高校を統合して総合学科を開設したものなど、さまざまなケースがあります。それぞれの学校の施設などを上手に活用できる科目を編成することも、より充実した教育を行ううえで重要となっています」

他県の場合、総合学科の生徒募集は県内全域から行っていることが多いが、広島県では学区制を設けており、他学区からの入学者数を制限している。生徒は自分の住んでいる地域の高校へ、という方針が貫かれている。また、それぞれの総合学科が、具体

教育委員会主導ではなく、実際のカリキュラム作りは各校に委ねている点が、広島県の総合学科の特徴の一つといえそうです。

報科学系列、芸術文化系列といったように、ある一定の体系を持った選択科目群を独自に定め、生徒はその中から履修科目を選択することになる。コース制とは違い、生徒は一つの系列に限定されることなく、さまざまな系列の科目を受講することができる。また、総合選択科目の体系には収まらない科目などを、自由選択科目として開設することもできるようになっている。

つまり総合学科は、普通科目を主とする普通科と、専門科目を主とする専門学科のどちらにも分類されず、さらに学習・進路計画を生徒自身の手委ねている部分が多い点が魅力といえる。

「特色と魅力のある高校作りは、実は総合学科設置前から進められていたんです。3年度には国際科を設置、4年度には体育科と福祉科を作りました。ただしこれらは、早い段階から将来的なことをやりたいかという目的意識を持って高校に入学する生徒に向けた学科です。生徒が高校に入学したあとに、興味・関心などに応じて比較的自由に科目を選択できる総合学科についても、設置する必要があると考えたわけです」

生徒自身の手で作り 上げられる総合学科

前述したように、広島県では10年度



広島県教育委員会事務局教育部教育企画課前課長
松木寛 Masaki Hiroshi
国語教諭として兵庫県で5年間、広島県で12年間教鞭を執る。平成元年度より広島県教育委員会に、教育企画課では、入学者選抜制度改革や総合学科の設置など教育改革の企画・立案に携わる。

ところで、これまでの中学卒業時の進路決定では、大学進学を希望して普通科に進む生徒や、その分野のプロになることをめざして専門学科に進む生徒がいる一方で、明確な進路意識を持ってないまま偏差値の輪切りのみを基準として普通科、専門学科に進む生徒も少なくなかった。だが生徒の興味・関心を重視し、多様な科目を用意した総合学科が登場したことで、普通科や専門学科に進む生徒像も変わっていくことが期待できる。例えば進路意識がまだ明確でなかったり、いろいろな科目を学んで自分の可能性を試したいという生徒は総合学科に進学。逆に早期から強い進路意識やプロ志向を持った生徒が普通科や専門学科に進むという選択が可能になった。生徒と進路先とのミスマッチが少なくなるということだ。

「総合学科を設置することで、普通科や専門学科も変わっていかねばなりません。まだ具体化はしていませんが、今後は専門学科でも、よりスペシャリスト養成をめざす教育を取り入れていくことになると思われます」

そんな時代が本当に来るのかどうかが広島県の今後の成果に注目したい。

高陽東高校は、総合学科を開設して今年で4年目を迎える。「この3年間で、確かな手ごたえを感じ取ることができた」と語る平越幸男前校長に、同校の教育指導体制について伺った。

まずは生徒自身の将来像作りから

生徒が自分の関心に沿って授業を選べるのが魅力の総合学科。高陽東高校でも、トータルで約130の科目を開講しており、そのほとんどが選択科目となっている。平成9年度卒業生240名が2年次に作った時間割の組み方を見てみると、実に207通りものパターンがあったという。まさに生徒は自分の時間割を自分で作れるというわけだ。

だが、入学したばかりの生徒の中で「やりたいことがはつきりしている」という生徒は実際にはごくわずか。1人ひとりの生徒の興味・関心が定まらないうちに選択授業を多く取り入れても

各都道府県が
取り組む
教育改革

広島県

事例紹介

広島県立高陽東高校

生徒の進路観を養う「産業社会と人間」の授業を重視

結局なにも身につかないことになりかねない。そこで同校ではまず、将来の職業まで視野に入れた進路観の養成に、なにより力を入れているという。

「生徒にはまず、自分が将来なりたい職業を頭に思い描かせ、その目標を現実するにはどんな学習が必要なのかを理解させるんです。きちんとした目標を持った生徒は、自主的に科目を選

び取ることができるようになります」

進路観を養ううえで最も大きな役割を果たしているのが、1年次に履修する「産業社会と人間」という授業である。各界で活躍している社会人を招いての講話、公官庁や企業の見学、キャンパス見学などがその主な内容である。夏休みには、約50の職種の中から生徒がそれぞれ興味のある職業を選択。実際に職場で実習をさせるといった体験学習も実施している。

「2学期の後半からは『産業社会と人間』の授業や放課後などを使って、個人面談とガイダンスを重ねていきます。これにより生徒は自分の進路プランを確立でき、2年次以降に本格化する選

択科目の履修にも対応できるわけです」

シラバスを作成し 的確な授業選択を

高陽東高校が総合選択科目で設置している系列は、日本文化系列、生活福祉系列、環境科学系列など全部で8系列となっている。科目の中には「家庭看護・福祉」「環境問題研究」など、生徒にはその内容がなかなかイメージしにくいユニークなものも少なくない。そこで同校では、生徒が迷うことなく科目選択ができるようにと、シラバス（授業計画書）の作成も行っている。1科目につき1ページを使って各科目の「目標」「具体的学習内容」「使用教材」などが書かれている。まるで大学並みの充実度だ。

『産業社会と人間』でのさまざまな行事の準備や、シラバスの作成など、教師の負担は大変なものです。しかし生徒の進路観を養い、その生徒に合った授業を提供するには、こつこつたきめ細かい指導は欠かせません。入学時には満足に作文も書けなかったような生徒が、みんなの前で堂々と自分の意見を発表できるようにするなど、見違えて成長していくんです。総合学科はこれからの高校教育を変ええる力になりつると確信しています」



広島県立高陽東高校前校長
平越幸男 Hirakoshi Yukio

これまで安芸南高校、安芸府中高校、呉三津田高校でも校長を務め、高陽東高校に着任したのは、同校が総合学科を導入した7年度から。平成10年3月末をもって退職された。現在は広島工業大学附属広島情報専門学校校長を務める。